



## LITERARY COSMOS

愛媛県立医療技術大学図書館報 第5号 2009.3.31

伊予郡砥部町高尾田 543 番地 (〒791-2101)

電話・FAX 089-960-0061

ホームページ <http://www.epu.ac.jp/tosyokan/>

### 図書館の役割と現状

学長 井出 利憲

図書館とは何だろう。人類の得た知識と情報が集約され、そこへ行けば知識や情報のすべてが得られる場所である。公開された知識と情報の全てが得られると期待できる大規模な図書館はごく限られたもので、多くの図書館はそれぞれ独自の目的と、それに応じた規模と特徴を持っている。

大学図書館の特徴は何だろう。まず必要なことは、教育と研究に必要な専門書や先端的な学術ジャーナルがそろっていることと、学生に必要な辞書・辞典や教科書・参考書と、一般教養に必要な広い分野の書籍や情報がそろっていることである。

教員にとって、自分の専門分野の参考図書やジャーナルの最低必要なものは、自分で買うものだと思っていた。文系の先生が、何百万円もする古書やセット本を自分でそろえたなどと聞くのは特殊な例であろうが、理工系や医療系でも基本的に必要なものはたいてい自分で買って読む。ただ、先端的な学術ジャーナルや電子ジャーナルへのアクセスは図書館に頼らざるを得ない。最大の問題は、学術ジャーナルも電子ジャーナルも膨大な費用がかかり、多くの大学で契約できなくなりつつあることで、これは大学にとって危機である。

教職員にとってもそうであるが、学生にとっても、情報源は本からではなくコンピュータでアクセスするものに急速に変わりつつある。学生のレポートなども、インターネットから情報を集めたものが多くなっている。インターネットの情報で問題なのは、新しいものを含むとしてもアヤシイものが相当多いことで、少なくとも、教科書による体系的で確かな知識の上に立った程度の判断力は必要で、それなしではアヤシイ情報を書き写しただけになりかねない。

そういう意味でも、辞書・辞典の類に加えて、適切な教科書や参考書がそろっている環境の提供は、未熟な学生にとって本質的に大切である。教科ごとに複数の参考書や専門書を学生の数だけそろえろとの声もあるが、それはいささか暴論である。ただ、同じ教科書がせめて20冊、あるいは1科目につき3種類の参考書が10冊ずつでも欲しいと思う。日進月歩で、次々に優れた教科書や参考書が出版される分野では、せめて5年ごくらいには更新したい。大学図書館の重要な機能のひとつはそこにあると思う。

多くの大学図書館が、学生の勉強場所になっている。自宅や下宿で勉強するより適度な緊張感が保てるためと、必要に応じて教科書・参考書や専門書・辞書を参照し易いなどの理由で、試験前になると夜遅くまで席が一杯になるのは、大学図書館では昔からありふれた、見慣れた光景である。学生の本分は勉強することにあるのだから、これはこれで図書館の大切な役割である。

大学の図書館を訪ねて、専門とは無関係な本がどっさりそろっているのは、大学としての見識を感じるところである。大学らしいなあ、と思う。教養教育とは何かについて様々な議論はあろうが、少なくともその素材の一部でも学生に提供しようとする大学の姿勢が大切である。

情報を受けるだけでなく、情報を蓄積し発信する役割として、大学の持っている資料や情報、あるいは研究成果、論文集、講義材料や講義記録などを、電子的にアクセス可能な材料として提供すると言ったサービスが、多くの大学で行われつつある。図書館が負担する仕事かどうか別として、大学に期待されるひとつの役割であろう。

様々な企画や展示を催したり、視聴覚器材や情報処理機器を活用した啓蒙的なセミナーや講演を

開いたりして、本や雑誌という情報から、もっと広く情報を利用する場としての活動を展開するケースもある。本学の場合はこれらに加えて、地域の方々や一般住民の方々（実際には専門職として仕事をされている方々が中心となるとしても）に広く利用いただける図書館としての役割も期待されている。

図書館の持つあるいは持つべきと期待される、このように広範な機能の中で、それぞれの特性に応じて比較的良く果たされているものと、なかなか難しいものがあるのは当然である。図書館で働く職員の方々は、司書という専門職としての仕事だけでなく、日常的な事務処理や利用者サービスの業務で相当に多忙である。そ

れは仕事と割り切るとしても、経費が削減され、必要な本や雑誌も補充できず、電子ジャーナルの新たな契約や機材の更新もできなくなる可能性がある中で、どういう図書館としてやって行けるのか、どういう図書館であろうとするのか、方向性がよく見えないままに仕事するのは、辛いことである。残念ながら、どこの大学図書館もそういう辛い状況にあって、将来のあるべき姿、可能な姿を模索している。期待されること全てに対応することが困難とすれば、どこに重点をおくべきかを含めて、他大学の例なども参考にしつつも、独自に抜本的な検討が必要とされている。

## 大学図書館のあれこれ

図書館長 おかだ まりこ  
岡田 真理子

はじめて図書館の運営にかかわることになって、とまどうことの多かった1年が早くも過ぎようとしています。ここで改めて、大学図書館の置かれている現状について、一般的なことも含めて書いてみたいと思います。

### 1) ジャーナル高騰化の影響

大学図書館は一般図書館とは異なり、教育研究に資する図書、学術研究雑誌、資料等を利用者に提供することが主な役割です。今、全国の大学図書館が直面しているのが、学術論文雑誌購読料の高騰化（毎年5～8%値上げ）による財政的負担増とそれに伴う購読雑誌数の減少です。多くの大学研究者が必要な研究資料を自由に読めなくなり、あるいはせつかく論文を発表しても多くのひとに読んでもらえなくなっています。

当大学ではどうかというと、予算の減少により、毎年、購入する雑誌数を減らしてきました。平成20年度には、もはやこれ以上減らすことができなくなったことを受けて、欧文雑誌をす

べて購入中止とし、代わりとしてデータベース化された電子ジャーナルを導入しました。それにより一応アクセスできる雑誌数は確保されましたが、最新号を読むことができる雑誌は多くはありません。当然のことながらその電子ジャーナルも年々価格が上昇しますので、現状もいつまで維持できるかわからない状態です。この問題については全学的に検討する必要がありますでしょう。

### 2) 機関リポジトリ

もはや大学図書館で、必要な雑誌をすべてそろえるということが出来なくなったことへの対抗策の一つとして生まれたのが、機関リポジトリです。機関リポジトリとは、大学・研究機関などの構成員による研究成果や教育用資料などを電子化して各機関のサーバーに保管し、一般に無料で公開するシステムのことで、通常、それぞれの図書館により運用されています。そもそもこのシステムは欧米で始まった取り組みですが、日本では2004年に第1号として千葉大学図

書館で初めて立ち上げられ、以後急速に全国の大学に広まり、2008年10月現在、86の機関がリポジトリを立ち上げています。また、同年10月には、国立情報学研究所が国内のすべての機関リポジトリをネットワーク化したポータルサイトを立ち上げ、機関リポジトリ内の情報検索が簡単に行えるようになりました。

これまで学術雑誌でしか読めなかった論文全文が、どこかの機関リポジトリに掲載されてさえいけば、誰でも、どこでも、面倒な手続きなしに無料で手に入れることができるようになってきたのです。最近では、KOBAYASHI and MASKAWAによるノーベル物理学賞受賞理由となった論文や、Cellに掲載されたYAMANAKAらによるヒトiPS細胞樹立についての論文が、いずれも京都大学の機関リポジトリ“紅”に公開され話題になりました。このような有名な論文だけではなく、リポジトリには必ず各機関が発行する紀要が掲載されます。今まで一般的にはあまり日の目を見なかった紀要論文が、容易に検索されるようになったことからよく読まれるようになり、他の研究者に引用される頻度も高まってきたという報告もあります。

このように書くと、機関リポジトリにアクセスさえできれば、研究論文雑誌を購入する必要がなく、従ってジャーナル価格高騰問題も一挙に解決するのではないかと、思われますが、そう簡単ではありません。解決すべき問題が残っています。ひとつは著作権の問題です。通常、私たちが論文を雑誌に投稿する際、著作権を雑誌の出版社や学会に譲渡しますので、たとえ自分が書いた論文であっても原則的には自由に一般公開することはできません。この問題については、すべてではありませんが欧米の出版社の多くが、世界的な機関リポジトリの流れに対応して、投稿論文の最終原稿という条件をつけてリポジトリに掲載することを許可しています。一方で、非営利の学会などではまだ無料の公開を認めていないところがあります。実際、KOBAYASHI and MASKAWAの論文については掲載誌編集事務局である日本物理学会等の格別の配慮により公開した、という但し書きがありました

し、YAMANAKAらの論文は著者の最終原稿でした。

もうひとつの大きな問題は、リポジトリに論文や資料を掲載するかしないかは、大学研究者、構成員自身の判断によるもので、必ずしもすべての研究者が自らの成果を公開しているわけではない、ということです。もっとも、すでに米国立保健研究所(NIH)は、NIHが研究費を補助した研究論文については、発表から1年以内にリポジトリへの掲載を義務づけたそうですから、いずれは日本でも公の研究費を用いて行った研究論文はリポジトリに掲載することが義務付けられる日がくることでしょう。

残念ながら、当大学では独自のリポジトリを立ち上げていませんが、愛媛県でも広島県や山口県で行われているような共同リポジトリ計画が持ち上がることを期待しています。

### 3) その他の問題

多くの大学図書館で夜間開館や休日開館が行われており、また、地域の一般の方々への開放も進んでいます。ところが、それに対応した安全対策が必ずしも万全ではなく、不安を抱えながら開館を行っている図書館が多いということが公立大学協会図書館協議会で話題になりました。当大学でも特別に図書館だけの安全対策というものは立てていませんでした。しかし、学生や利用者から開館時間を延長してほしいという要望が根強くあり、それに対応するためにも安全対策は早急に取り組まないといけない問題でした。幸いなことに、このことについては、周囲の理解もあり、最近、図書館に防犯ベルが設置されました。防犯ベルが使用されることがないことを願いつつ、それでも万一のことを考えると少し安心したというところです。開館時間延長の問題についても、今後前向きに検討していきたいと考えています。

大学図書館を取り巻く厳しい状況は今後も続くでしょうが、従来の役割を果たしながら、急速に変化していく学術情報社会にも柔軟に対応できる図書館であるように、図書委員、図書館職員一同努力していきたいと考えています。

今年度は、本学の同窓生やゆかりの方々の国際的活躍をシリーズで紹介しました。

第1弾：5/30～7/31

高田 多津男さん（元国立善通寺病院検査技師長、本学臨床検査学科非常勤講師）は、2004年と2005年の2回、カザフスタンにおいて、JICA 専門家として細胞診断技術を指導してられました。今回の展示に際し、本学の学生さんに向けて次のようなコメントをいただきました。

『皆さん方は本学を卒業されたら、それぞれ医療の現場に就職されると思います。今世界に目をやると、多くの国々が医療支援を求めています。私の希望は、皆さん方の若いパワーをこれらの国々で有効に使ってほしいのです。私の場合は定年後でしたが、原爆実験を多数行ったカザフスタンで細胞診断業務の普及を行ってきました。ここはがん多発地区で、私の技術が強く求められたのだと思います。まだまだ世界中には、皆さん方の医療技術を求めている国は多数あると思われます。今 J I C A ではアフリカ支援を重点的にやっており、医療支援においてもスタッフが不足する状態です。本学で学んだ看護学および臨床検査学を有効に生かして積極的に参加されることを強く希望します。』



パソコンを使った細胞診断技術指導

（担当：岡田委員長）

第2弾：8/1～10/31

## JICA青年海外協力隊への参加



### 隊員紹介

氏名：酒井康子さん（看護師・保健師） 出身地：愛媛県伊予郡松前町  
 派遣国：東アフリカ マラウイ共和国 配属先：国立機関である診療所 ロビ ヘルスセンター  
 活動内容：疾病予防・公衆衛生等の保健指導 母子保健・学校保健・HIV/AIDS 対策  
 活動期間：平成15年7月15日～平成17年7月14日

### 青年協力隊の動機



「生きるってどういう事？ 幸せって何だろう？」  
 看護師、保健師、ケアマネージャーとして働く中で、様々な方との出会いがあり、私の中でこの問いが常に付きまとっていました。公衆衛生の向上、高度医療、保健・医療・福祉などの様々な制度に支えられ、平均寿命は世界でもトップの座を占めている日本。世界規模で見ると一見幸せそうに見える私たちの国ですが、課題は多く残されています。  
 「自分自身の生き方も含めて、いろんな事を見直したい」これが協力隊応募の理由でした。



### マラウイ共和国での活動の実際

私は、2003年から2005年の2年間、東アフリカの小国マラウイで、看護師兼保健師として村の小さなヘルスセンターで活動しました。  
 任地では水道や電気、電話、舗装路、交通などの社会基盤は整っていませんでした。  
 また医療従事者の不足、治療に必要な薬や物品も常に不足しており、十分な治療は行えませんでした。  
 このような状況下では、比較的簡単に治る病気でも亡くなる人が少なくありませんでした。平均寿命は37.5歳。5歳まで生きられない子供は1000人中183人。HIV/AIDS感染率は14.4%（100人のうち約15人が感染。）



手洗い場



貴重な食料

自分達の健康は自分達で守れる様に、プライマリーヘルスケアと呼ばれる公衆衛生の保健指導に力を入れました。

トイレの設置、手洗い指導、清潔な水や食料の確保と保管、バランスのとれた食事等の基本的な公衆衛生や生活改善は、疾病予防と保健の必須条件です。

ただし、村人は援助慣れの悪影響で、いつ手に入るかわからない薬に頼り、生活改善を行わない人が少なくありませんでした。そこで、幼い時からの知識の取得と習慣化をめざし、学校保健を導入し始めました。

子供達は保健指導に興味をもっています。習慣化の為に繰り返し指導と観察が必要です。あせらずにゆっくり、でも確実に根付かせていきたいと願い、現地のヘルスサーベイランスアシスタントと共に実施していきました。HIV/AIDSに関しては、学校を中心に、ゲームやクイズ、紙芝居、歌などを用い、楽しみながら学べる様工夫しながら、学生と共に活動していきました。



### メッセージ

これらの活動を通して伝えたかった事は、一度しかない命を大切に、自分自身で守って欲しいという事でした。一度しかない人生です。お互い今を、そして自分自身を大切に生きていきましょう。皆さんの輝かしい未来を願って・・・。

（文責：酒井康子さん 編集：松井委員）

## JICA青年海外協力隊への参加

### 【ふもと ゆかり 麓 由香里さんのプロフィール】

- H6 愛媛県立医療技術短期大学 第一看護学科入学  
H9 愛媛県立医療技術短期大学 専攻科地域看護学修了  
H9.4月~H12.3月 愛媛大学医学部付属病院 脳神経外科・麻酔科病棟看護師  
[H12.4月~H14.8月 JICA 青年海外協力隊に参加 「フィリピン」へ](#)  
H15.1月~H16.3月 伊予市保健センター 嘱託保健師  
H16.4月~現在 愛媛県保健師 “愛媛県心と体の健康センター” に勤務



<マラリア予防のため、蚊帳の配布にいくところ(麓さんは写っていません)>

### 【麓さんから学生さんへのメッセージ】

医技短で学んだ4年間は、とても濃いー(笑)期間でした。みなさんはどうですか？看護とは？ということもよく分からないまま入学しました。でも同級生たち、先生、先輩、後輩と過ごした一日一日で、少しずつ自分の看護観を作っていったように思います。今では、看護学を勉強できたこと、その仕事に就けることを、とてもうれしく思っています。

いつか、みなさんが学んでいることが、世界中のどこかでできらっと輝けますように……

(担当：柴委員)



作岡南美子さん

愛媛県立医療技術短期大学臨床検査学科卒業、  
愛媛大学医学部附属病院診療支援部生理機能検査室勤務。  
本プロジェクトでのモンゴル渡航は3回（2003年10月6日～15日、  
2005年7月28日～8月7日、2006年8月5日～8月12日）

## ハートセービングプロジェクトとは

島根大学に留学していたモンゴル人小児科医師より、日本とかけ離れたモンゴル医療の現状を聞いた小児循環器医師ら有志が集まり、現地でも可能な治療技術提供などの支援をするべく立ち上がったプロジェクト。

モンゴル国の医療の発展と自立を目指しており、現在では小児循環器医師を中心とし、臨床工学技士、看護師、臨床検査技師ら有志により渡航支援を続けている。

2001年10月より実施しているこのプロジェクトは、2008年の夏でモンゴル渡航9回目を迎えた。また2008年8月には、ハートセービングプロジェクトのNPO化が認可された。



## ハートセービングプロジェクトの活動内容

### 1. モンゴル国地方都市での検診活動

- 1) 受付と検診カルテの作成
- 2) 心電図検査
- 3) 診察
- 4) 心エコー検査
- 5) 診断と治療計画

### 2. 中央診療施設での心臓カテーテル治療

首都ウランバートルにある国立病院では、隣国ロシアや中国などで新しい医学を学んだ医師が揃い、他国からの援助による透視設備などが整う。

### 3. 現地医療スタッフへの診療技術の提供

治療に必要な多数の患者ふり分けに有用な心臓超音波検査や、先天性心疾患に対する心臓カテーテル治療法、また術後管理についても講義や実践を通して現地医療スタッフに伝えることで、モンゴル国の医療水準の向上を目指す。



**参加のきっかけ**は、チームの一員である愛媛大学病院小児科医の体験談である。

このプロジェクトの趣旨を聞き、日本の日常診療とは全く別の環境で、同じ目的をもって自ら集まった全国からの有志が、モンゴルでまたその医療技術を寄せ合い子供たちを救っていることに深く共鳴した。そして、日頃循環器領域にかかわる検査をしている私にも手伝えることがあるのではないかしらと思いついに任せて先生にお願いすると、翌日にはチームリーダーから連絡があり、「今回から立ち上げる検診活動の一員として心電図検査をして下さい。」との返事だった。渡航3週間前のことである。

場所は関係ない。命を救う責任感と同時に自分の非力さを感じたのを覚えている。

「自分に出来ること」を真剣に考え直したことで、帰国後もっと明確な目標を持って検査に取り組むことが出来たし、翌年、超音波検査士認定を目指すきっかけともなった。

日本のように物や情報に埋もれることなく、目の前のこどもの命を救うというただ純粋な思いが集まることで、多くのこどもたちの笑顔を絶やさずに来られたと思う。「モンゴルに来ると医療の原点を実感する。」とは大学の小児科医の言葉である。

(担当：伊藤委員)

## おすすめの一冊

**貯められない女のための  
こんどこそ！貯める技術**  
池田曉子 著  
文藝春秋 2007年

看護学科3年 やまうち 山内 かな 香奈

みなさんは生活しているなかでふと、「あれ？今月お金が残り少ないな。何に使ったんだろう？」ということがありませんか？正直私はよくあります。特に何か大きな買い物や、贅沢をした覚えがないのに財布や口座のお金が残り少ない。いつの間にか消えている。大学生になって大分経つのに、このままでは就職して自立していくとき、家庭をもったとき、果たして自分がしっかりお金を管理できるのだろうかと思いました。そんな時に出会ったのがこの本です。題名を見た瞬間に自分にピッタリだと確信しました。中を見てみるとかわいいイラストで、活字を読むことが苦手な私でも平気です。この本の著者である池田さんが、四国の出身ということも身近に感じたひとつかもしれません。

内容には、池田さんの体験や日常が面白く描かれています。読みすすめるうちに、池田さんの体験でも自分にも確かによくある！ということがたくさん出てきて、自分の金銭感覚も振り返ることができます。池田さんが実際に取り組んでいる、お金を予算内でやりくりする方法だけでなく、上手く貯める方法やポイントが紹介されていて、とても分かりやすいです。

この本を読んだら、これがやりくりか！と納得できますし、“なんとなく無駄遣い”からも抜けられて、メリハリのあるお金の使い方ができます！貯金することが身近に感じられて、興味をもつことができます。

皆さんも大学生のうちにお金のやりくりを身につけませんか？今、一人暮らしをしている人は自分で上手くやりくりできるようになるチャンスです。実家から通っている人も、将来はお金をきちんとやりくりできて、貯金もできる社会人になりませんか？

イラストもかわいいので、誰でも楽しく読めると思います。是非読んでみてください。

**図書館戦争**  
有川浩 著  
メディアワークス 2006年

臨床検査学科3年 はしくち 橋口 ともみ 友美

私は昔から読書が好きである。ジャンルは問わず、ミステリーやファンタジーなど様々な本を読んでいる。今回私が紹介する本は恋愛・軍事物である。この本はシリーズとして出ており、計6冊出版されている。

この本は公序良俗を乱し人権を侵害する表現を取り締まる法律として『メディア良化法』が成立・施行され、この法律に反する本が狩られる現代、この法律に対抗するために図書館という場所が本を守るために戦うという内容である。こう言葉にすると難しいが、本を狩る側と本を守る側の戦いであり、自由に本を読むために図書館に作られた図書基地の特殊部隊に所属する新人の笠原都が同じ仲間の人々と本を守るために戦い、成長していく姿を描いている。

この話はタイトルどおり図書館の戦争である。主人公やその周りの恋愛も含まれているが、ときには現実の戦争と同じように人を傷つけ、傷つけられる立場であるということなど、シビアな内容も含まれている。このシビアな内容は私達一人一人が考えていかなければいけないことが題材にされていると思う。戦争だけでなく、障害、言葉、人間関係、思想など、様々な現代の問題が描かれている。この1つ1つに考えさせられ、この本で感じたことを心にとどめておこうと思うような本である。

しかし、シビアなだけでなく時にコミカルで笑ってしまうようなことも多い。特にメインのメンバーの掛け合いは本当に笑え、大の大人がこんな遊び心満載でいいのかと思ってしまうこともある。恋愛話は色々なカップルがいて、この作品の作者である有川浩先生の特徴である「ベタで甘い」内容で、じれったい人達に読みながらやきもきしてしまったり、思わずじたばたしたくなるような甘さがあったりする。

この本は漫画やアニメにもなっており、小説が苦手な人にはそれらから手を伸ばしてみるのもいいと思う。特殊な舞台設定だが、笑ったり泣いたりできる素晴らしい本であるので、読んでみてはいかがだろうか。



## おすすめの一冊

### 14歳からの哲学:考えるための教科書

池田晶子 著

トランスビュー社 2003年

看護学科3年 のむら 野村 あかり 朱里

情報が溢れて何が本当なのかわからない現代、自分自身で「考える」という力が必要とされている。この本はその自分自身で考える力や考えるきっかけを与えてくれる。私も幼いころはよくいろいろなことに対して「何でだろう?」という疑問を抱いて、世の中を見ていた。どうして雲は浮かんでいるのだろうかということから始まり、私はどうして私なのだろうかというような途方もないことまで、ありとあらゆることが不思議で分からないことであった。しかし、大きくなるにつれて「どうしてだろう?」と考えることは少なくなり、自分の感じていることや目の前の事象に対して「世間で良いと言われているのならこれは良いことなのだろう」や「こう習ったからこうなんだ」と当たり前のこととして何の疑問ももたなくなった。また、自分が普段考えていることに対しても、なぜ自分がそう思い、感じるのかということをしつくり考えることはあまりない。そのことが本当にそうなのか、自分が今感じていることはどこから来たものか?と自分で考えることはやめ、ただなんとなく当たり前のこととして日々通り過ぎてしまっている。

しかし、この本は普段何気なく自分が感じたり当たり前と思っていることを、根本から本当にそうなのか

と問いかけ、ただ「思う頭」から「考える頭」へとシフトさせてくれる。日常生活に溢れている当たり前で特に意識もしていないようなことに焦点をあてて、自分の思っていることを本当にそうなのだろうか?と考えるきっかけを与えてくれるので、もう一度自分の頭でどうしてそうなのか?と考えると、意外にそれは自分の思い込みや他の人の考えであったことに気づかされる。また、自分は「考えていた」ようで「思っていた」だけで、「考える」ということと「思う」ということをごちゃ混ぜにしていることにも気づかされる。この本の考えるテーマは「言葉」や「心」ということから始まり、「存在」ということまでを哲学的に考えている。しかし、何も哲学的に物事を考えなくてはいけないというわけではなく、この本は副題にもなっているようにひとつのことを順序だててじっくり考えるという、「考える」練習ができる本であると思う。自分で「考える」ことが出来れば、さまざまな情報にも流されず、真実は何かということが分かるようになる。最近、ただ漠然と日々が過ぎていくと感じたり、自分の見ている世界を違う視点から見たい、考える力をつけたいと思っている時に、この本を読んでみてもおもしろいと思う。

## 寄贈資料ご紹介

図書館では、蔵書の充実のために、さまざまな機関や個人の方から図書等の寄贈を受け付けています。今年度寄贈いただいたものの中からご紹介します。皆様是非ご利用ください。

### ◆平成20年度卒業生の皆様より

『新臨床内科学 第9版』 医学書院 2009年

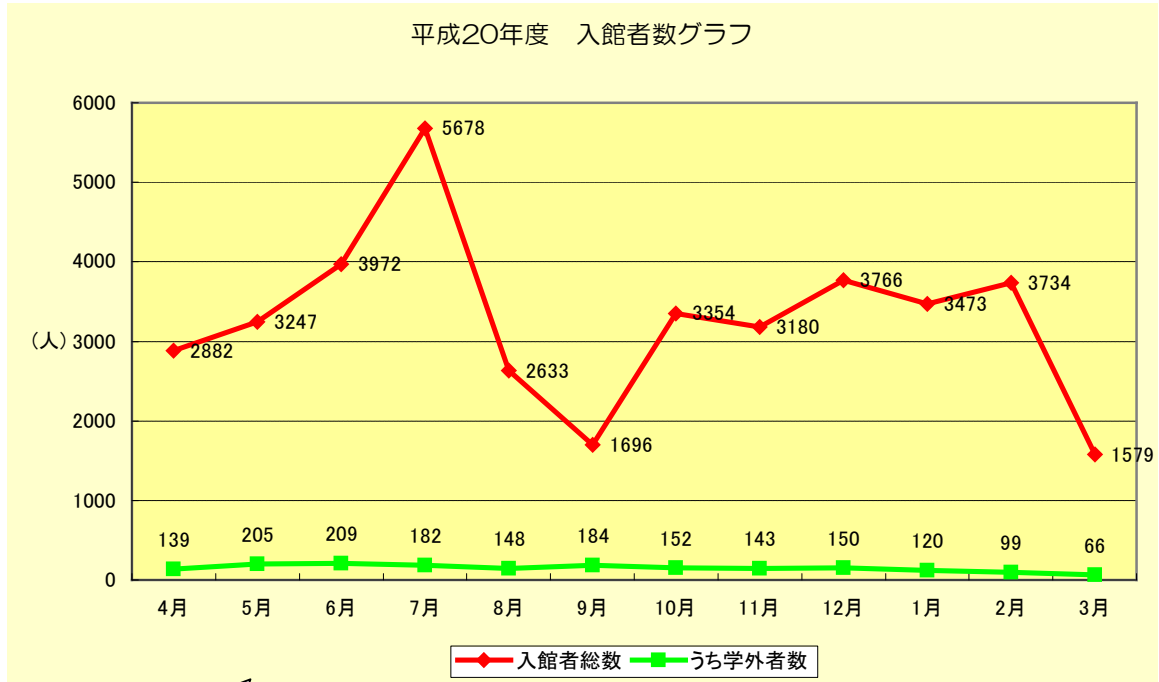
『ICUブック 第3版』 メディカル・サイエンス・インターナショナル 2008年

『イラスト解剖学』 中外医学社 2009年

『今日の治療指針 2009年版』 医学書院 2009年

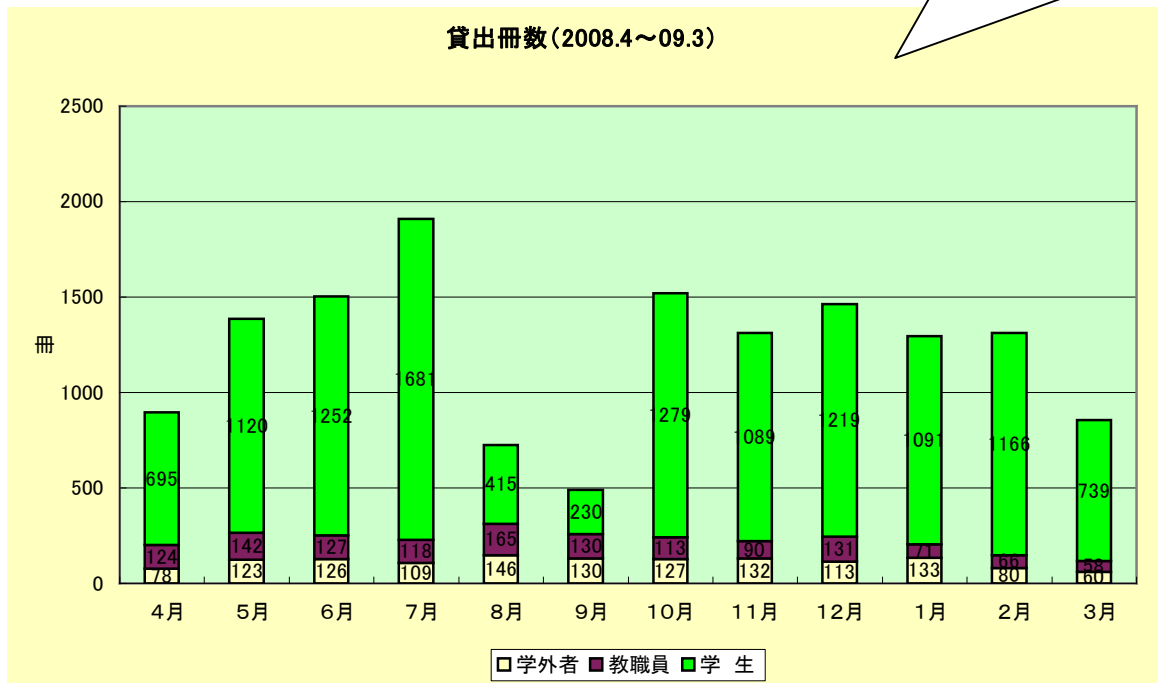
〈Graphic Report〉

.....図書館の利用統計 2008.....



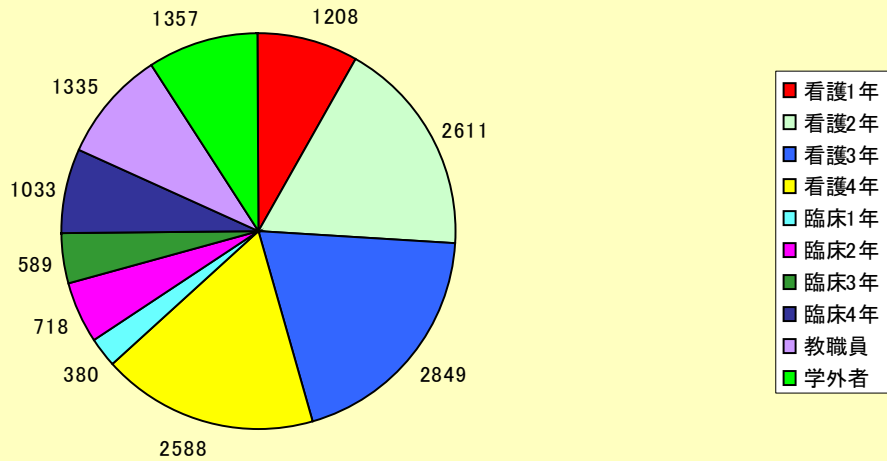
入館者の総数は 39,194 人で、そのうち学外者は 1797 人である。試験の時期が多く、7月が突出している。夏季休業中の8月・9月、休館日の多い3月が少なくなっている。学外者は月ごとに大きな変動はない。

貸出総数は 14,668 冊で、約 8 割が学生の貸出となっている。入館者と同様に7月が多く、8月・9月・3月が少なくなっている。教職員と学外者の貸出冊数はほぼ同程度である。



図書館の利用統計 2008

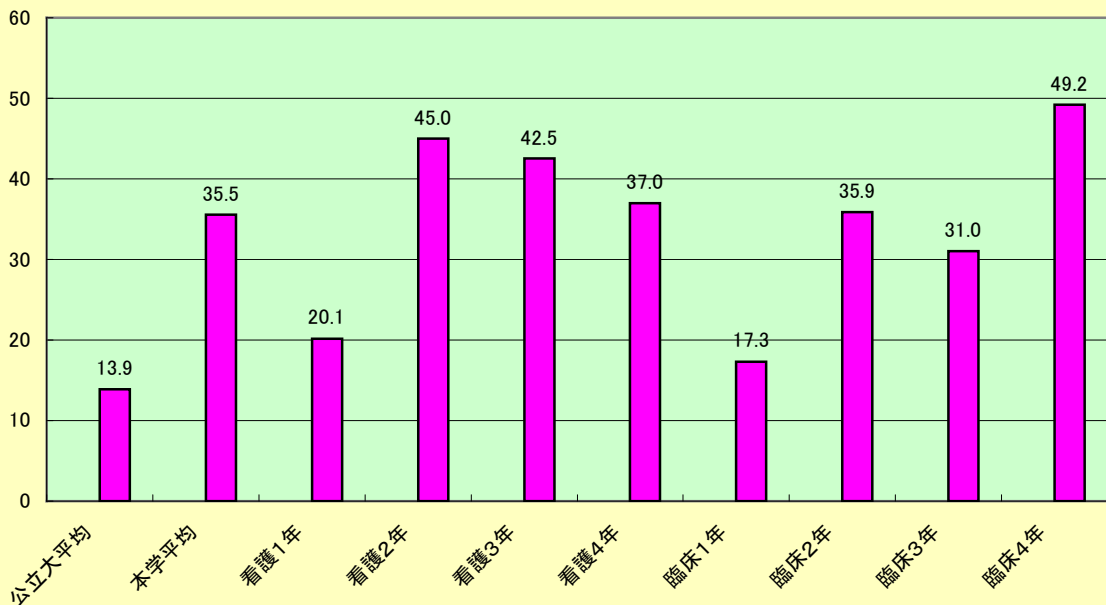
学科学年別貸出冊数(2008.4~2009.3)



看護学科・臨床検査学科・教職員・学外者の割合がおよそ6：2：1：1となっている。学生の学年別では、両学科とも1年の貸出が少ない。2～4年はほとんどの学科学年で1年の2倍以上の貸出となっている。

学生1人当たりの年間貸出冊数では、どの学科学年とも、公立大学の平均13.9冊より多く貸出している。1年は公立大学の平均をわずかに超える程度であるが、2～4年では、公立大学平均の2～3倍の貸出があり、本学学生の平均は35.5冊である。今年度は臨床検査学科4年が一番多かった。

学生1人当たりの年間貸出冊数(2008.4~09.3)



※公立大学平均は2007年度のもの。『日本の図書館2008』（日本図書館協会）より算出

